

人間国宝
歌舞伎俳優
坂東玉三郎
「お話と素踊り」



坂東玉三郎
大和屋(五代目)

1957年東横ホール『寺子屋』の小太郎で坂東喜の字を名のり初舞台。1964年十四代目守田勘弥の養子となり、歌舞伎座『心中刃は氷の朔日』のおたまほかで五代目坂東玉三郎を襲名。歌舞伎の枠を超え、世界の芸術家に賞賛を得てきた。ヨーヨー・マなどとコラボレーションを展開し、国際的に活躍。
2012年重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。多くの賞を受賞。



梅川壱ノ介
舞踊家

大分県日田市出身、新潟大学卒。
東京バレエ団、歌舞伎俳優を経て、日本舞踊を基軸とする舞踊家に転身。師匠は人間国宝坂東玉三郎氏。現在、日本航空(JAL)で流れている降機ビデオに出演している。舞踊公演のほか、詩や俳句、オーケストラなど様々なジャンルと日本舞踊のコラボレーションを手掛けている。海外では2019年『日ギリシャ修好120周年記念公演』、2025年『日本歌舞伎舞踊と中国京劇文化の交流公演』などを勤める。近年は坂東玉三郎『お話と素踊り』公演において、質問コーナーの聞き手役を勤めている。

8/30 土 相模女子大学グリーンホール(相模原市文化会館)

主催:サンライズプロモーション東京/テンポプリモ 共催:(公財)相模原市民文化財団

9/6 土 和光市民文化センター(サンアゼリア)

主催:サンライズプロモーション東京/テンポプリモ 共催:(公財)和光市文化振興公社

9/7 日 江戸川区総合文化センター

主催:サンライズプロモーション東京/テンポプリモ 共催:江戸川区/江戸川区総合文化センター

9/13 土 カネヨシプレイス(みよし市勤労文化会館)

主催:ホームックスグループ共同企業体 後援:みよし市/みよし市教育委員会

9/15 月 兵庫県芸術文化センター

主催:関西テレビ放送/サンライズプロモーション東京/テンポプリモ

9/23 火 SG GROUPホールはちのへ(八戸市公会堂)

主催:青森朝日放送/サンライズプロモーション東京/テンポプリモ 共催:デーリー東北新聞社 後援:青森県教育委員会

制作:ドゥ デザイン

アンケートへのご協力をお願いいたします



〈 演 目 〉

時空を越える、豊潤な時間

文 Ⅱ 大木夏子（編集者・ライター）

お話コーナー

坂東玉三郎「お話」

梅川壺ノ介「聞き手」

地唄舞「残月」

坂東玉三郎「素踊り」

※約105分休憩あり

〱磯辺の松に 葉隠れて

沖の方へと入る月の 光や夢の世を早う

覚めて真如の明らけき

月の都に住むやらん

今はつてだに朧夜の

月日ばかりはめぐり来て

磯辺の松の葉に隠れながら、ついには遠い沖へと消え入ってしまう月のように、この世を去ってしまった。今は真実の光がさす浄土、月の世界にいるのでしょうか。もう便りをして朧夜のように伝わらず、月日ばかりがめぐってくる――短い生涯を閉じた娘への思いが胸に響きます。玉三郎さんはこの曲と歌詞に心を打たれ、二〇一九年八月歌舞伎座で主演とともに演出も勤めた『新版雪之丞変化』で、仇討ちを果たした雪之丞がその虚しさにさめざめと引っ込んでゆく際に、「今はつてだに……」からを流したそうです。

追憶や鎮魂が込められている歌の成り立ちから、追善曲として上演されることも多い『残月』。歌と歌の間の間奏に重きをおかれた手事物の代表作であるこの曲について、地唄の名人初代富山清翁に「昔を思い出して奏でていればいいんだよ」という話を聞いたという玉三郎さん。振付にあたってはその話をいかして、「早くに亡くなってしまった若い女性が蘇って、しばし二人での楽しい時間が過ぎてゆく。そして、ふたたび月が出た時にやっぱりその人はいなかったんだな、というようなものにできたら」と考え

二〇二一年の夏に始まった「お話と素踊り」の公演。劇場にまだコロナ禍の影響が残る時期に満員の観客で埋まった客席は、夏の暑さとは違う熱がありました。

「今の時代、携帯電話やパソコンの画面越しにリモートで話すことができますが、やはり、直接会って対話をする、舞台と客席とはいえ触れ合うことができる、そのことを皆さんが待っていてくださったんだと改めて感じました。それは自分にとっても非常に喜びでした」という言葉通り、玉三郎さんは歌舞伎座や南座、大阪松竹座などで歌舞伎公演を勤めるなか、全国各地のお客様に会いに行き、この公演を続けています。そして四年目を迎える今回は、素踊りでの地唄舞の演目がこれまでの『雪』から「残月」へと変わります。

作曲家は『雪』と同じ、峰崎勾当^{みねざきこうどう}。峰崎の門人だった大坂宗右衛門町松屋某の娘が夭折したことを偲んで作られた名曲です。娘は箏の名手で才媛であったと伝えられ、曲名はその法名「残月信女」からつけられたといわれています。曲はもちろん、月の情景が命の儚さをそこはかとなく照らすような叙情溢れる歌詞も美しい作品です。

を明かします。そして、「もしかしたら、皆様のなかにも先に逝かれた人のことを思う方もいらっしゃるかもしれないですし、夜空に輝く月を見た時の虚しさ、あるいは清々とした思いを感じていただけるように」と続けました。

地唄舞は削ぎ落された静かな動きで見せる舞で、作品の多くは十数分のもので。江戸時代には遊里や座敷のような狭い空間で舞われていました。しかし、玉三郎さんの舞は、ほんの小さな動きから深い情感が滲み出て、劇場空間が宇宙のように広がっていく感覚に誘います^{いざな}。十数分の時が一瞬にも何時間にも感じられるような陶酔。「短かければ短いほど、幕が開いた時にどういう時空を背負っているかということが大事だと思うのです」と話す玉三郎さんの踊りには、その人物がこれまで辿ってきた人生を感じさせる引力があります。と同時に、坂東玉三郎という比類なき女形の魂に触れるような感動もあるのです。

地唄舞を初めて舞ってから三十年の月日がたつという玉三郎さん。その魅力を「音の余韻のなかに詞が入っていく。その余韻のなかで、いろいろな空間を想像できることが、地唄舞のひとつの醍醐味だと思います」と語っています。『残月』のなかに、煌々と光る月が見えるのか、朧に淡く光る月が見えるのか、観客の数だけその月の光があるのかもしれない。

稀代の女形のプライベートが垣間見える楽しい「お話」から、その真髄を堪能できる「踊り」まで。時空を飛び越えて豊潤な時間をお楽しみください。